

モンゴルの古城址と居住址について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00057200

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



モンゴルの古城址と居住址について

Kh. ペルレー
(大谷育恵 訳)

太古よりモンゴル人民共和国領域に居住した民族について、現在知られている文献ならびに考古資料が証明するのは、一部は遊牧民であり、また一部は集落に定住して住んでいたということである。モンゴルにおける古代の居住地点は、手工業と交易の町、戦争の要塞、封建的な館、ハーンとその大臣らの宮殿として出現した。大多数の古代モンゴルの城址は、宮殿区、交易 - 手工業区、そして農奴 - 貧農あるいは遊牧民の強制的居住区からなっていた。

モンゴルに紀元前 1 千年紀にいた種族は、居住地点を取り囲むあまり大きくない土の要塞を築いた。しかしその後モンゴルを支配した多くの種族は、城と定住集落を築かなかった。そのため、同国の領域内においては、城址と居住址の発達の上で著しい中断が観察される。このように、現在のところ、後 1 ~ 5 世紀の城址と居住址に関する文献資料も考古資料も見出すことができないのである。

モンゴルの古代城址と居住址は、様々な時代、様々な歴史的条件、そして互いに遠く離れた距離で出現した。それにもかかわらず、城址と居住址は中断としばしば相互無関係をはさむとはいえ、大きな社会的・経済的意味を有し、また経済的かつ文化的な種族の発展を促した。

したがって、古代のモンゴルをただ遊牧種族の住民だけの国とみなしてはならない。モンゴルの古代城址に関する問題は、モンゴルの古代国家の問題、そしてモンゴルにおける封建体制の出現と発展の重要な部分なのである。

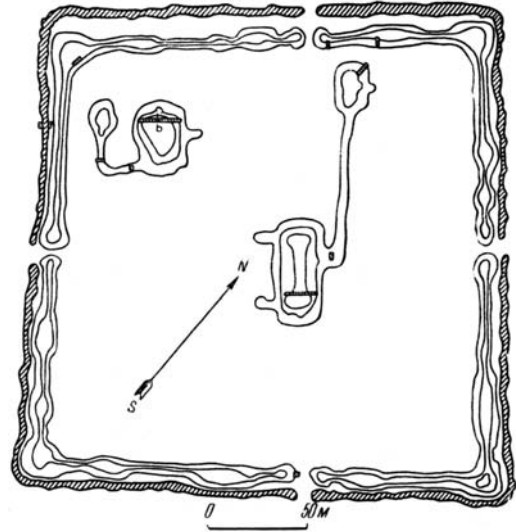


図 1 テレルジーン・ドルボルジン匈奴城址のプラン (トゥブアイマク)

モンゴルにおける最も古い城址と要塞的居住址は、前 3 ~ 前 1 世紀に中央アジアを支配した匈奴に関するものである。『史記』によると、モンゴルの地において、匈奴に関する城が 3 ~ 4 基あったという。

そして、これらの城は「ハルハ・モンゴルの北道」(後のトゥシェート・ハンアイマク (Түшээт хан аймаг))¹⁾に築かれた。『史記』によると、これら匈奴時代の城址は、大多数の場合において、支配者である単于の宮殿、匈奴の国に移った中国人將軍の館ならびに邸宅が置かれていた場所であった。

最近発見された 5 基の城址は、エニセイ川、セレンゲ川、ヘルレン川の諸河川河谷にある匈奴の要塞である。もしそれらに、さらにトゥシェート・ハンアイマク (現アルハンガイアイマクならびにボルガンアイマク)²⁾の 5 基の城址を入れると、匈奴の広大な領域に 10 基の城址が存在したとみていいだろう (図 1, 2, 3)。

これら要塞から発見された土器片、建物壁の外装

れらは 47 か所のみ判明している。S. V. キセリョフ「古代のモンゴル」p.380)。

3 『蒙古游牧記』(張穆 [撰]³⁾、ポポヴァ P. S. [訳])。Попова П. С., 1895, *Мэн-гу-ю-му-цзи*, СПб: 382. [『蒙古游牧記』サンクトペテルブルク: 382]

『大清一統志』3 卷, p.45, 71. (写本: ウランバートルの国立図書館書庫)。さらに古い時代、特に板石墓文化期 (前 7 ~ 前 3 世紀) からは、定住度の高い農耕種族の多数の居住地が残されている。

1 Киселев С. В., 1947, Монголия в древности, *Известия АН СССР, серия истории и философии, т. IV, вып. 4*. [キセリョフ S. V. 「古代のモンゴル」『ソビエト科学アカデミー報』歴史・哲学 IV-4]

Киселев С. В., 1957, Древние города Монголии, *СА 1957-2*. [キセリョフ S. V. 「モンゴルの古代都市」『ソビエト考古学』1957-2]

История Монгольской Народной Республики, М. [『モンゴル人民共和国史』モスクワ]

2 1956 年に、モンゴル人民共和国科学委員会の歴史室は 220 か所の廢城址と要塞を登録した (1947 年にそ

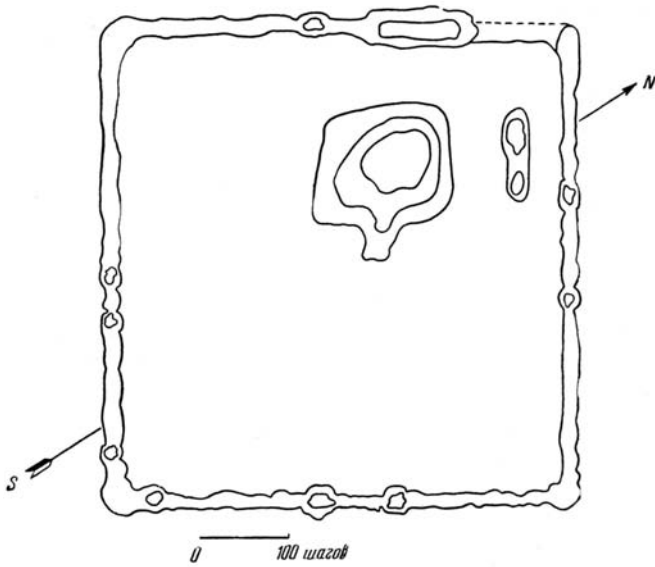


図2 ゴア・ドフ匈奴城址のプラン（ヘンティー県）

磚と瓦は、匈奴墓地と中国漢代の多数の墓地と建築遺跡で出土するものと完全に一致している⁴（図4）。

これら要塞のほかに、匈奴領土の各地に無防備の農業居住地が存在した。それらの出現は、かなりの度合いで所有穀物ストックの創出につながる単于⁵らの傾向を生み出した。

後1～8世紀のハルハ・モンゴルの地において、城址と居住址の存在に関する文献ならびに考古資料は数が多くない。

中国の歴史記録⁶には、アルタイ山脈に突厥^{とつげつ}可汗の宮殿があり、オルホン川流域には突厥のビルゲ可汗の有名な壊れた宮殿があったと指摘されている。同箇所にはハンガイ山脈付近に鮮卑と戦った烏孫王の宮殿（あるいは城址？）があったとあり、その後で彼らの世界を打ち建てた。

5～8世紀のモンゴルを支配した種族と民衆、特に蠕蠕^{ぜんぜん}と突厥は製鉄で名高い。彼らの居住地には鍛冶屋と鉱石採集者がいた。

4 Киселев С. В., 1951, *Древняя история Южной Сибири*, М.: 479-484. [キセリョフ S. V. 『シベリアの古代史』モスクワ: 479-484]

5 Бичурин Н. Я., 1950, *Собрание сведений о народах, обитавших в Средней Азии в древнейшие времена, т.1*, М.-Л.: 76, 78. [ビチューリン N. Ya. 『古代に中央アジアに居住した民族に関する資料集』1巻、モスクワ-レニングラード: 76, 78]

6 『大清一統志』（モンゴル時代）巻3、47頁。

7 『蒙古游牧記』（ポポヴァ P. S. [訳]）、382頁。

8 同上、382頁。

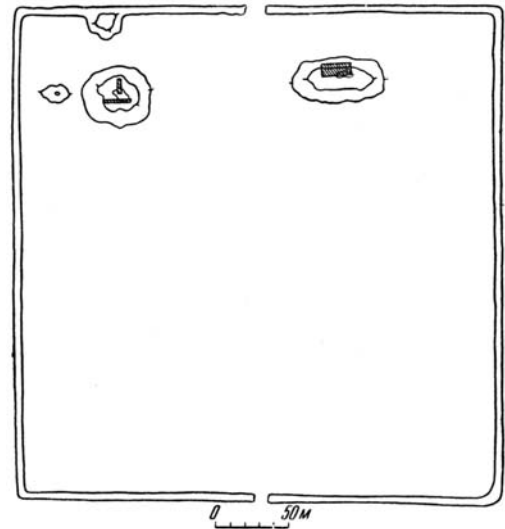


図3 ヘルレン川沿いのバルス・ホトII匈奴城址⁵⁾のプラン

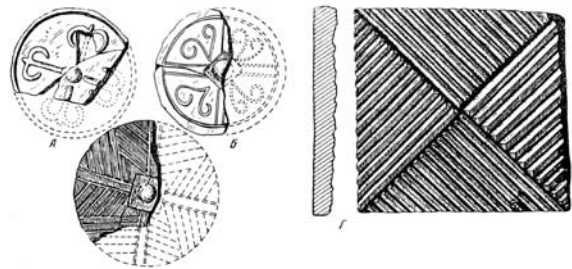


図4 匈奴城址の調査にともなう遺物

A: ブルヒーン・ドルボルジン城址出土の瓦当（トゥブ県）；B, B: ゴア・ドフ城址出土の瓦当；Г: ゴア・ドフ城址の供物台で出土した外装磚

7世紀後半から8世紀中葉にかけて、モンゴル領域に居住した種族は、社会階層の組織化プロセス、すなわち経済原理の確立、そして都市出現の容易化、に突入した。城址と居住地はモンゴルの社会生活において重要な役割を果たし始めた。

ウイグル帝国期、すなわち8世紀後半に、オルホン川河畔に首都バリクリク（Бальклик）（現在のハル・バルガス（Хар балгас））が築かれた。セレンゲ川沿いにはバイバリク（Байбалык）（現在のビーボラク

9 Рамстедт Г. И., 1912, Как был найден «селенгинский камень», *Труды Троицкосавско-Кяхтинского отделения Приамурского отдела Императорского Русского географического общества, т. XV, вып.1*, Кяхта: 34-39. [ラムステッド G. J. 「どのようにして「セレンゲの石」は発見されたか」『ロシア帝国地理学協会プリアムール部トロイツコサウスク-キャフタ支部報告』15巻1号、キャフタ: 34-39⁶⁾

『大清一統志』（モンゴル時代）巻3、48頁。

(Бийбулаг) とヘドウン (Хэдун)¹⁰の町が出現した。バイバリクには中国人商人とソグド人が定住した。貿易商と共に、そこにはソグド人学者らも訪れ、彼らは中でも仏典をウイグル語に翻訳した。ソグド人と中国人以外に、これら城址にはアラブとチベットの貿易商がやってきた。これまでに、これら土城の周りを取り囲む巨大な水に浸かった痕跡が明らかになっている。ウイグル時代の倒壊した居住地の調査は、この時期の封建的制度のための典型的な都市の特徴を最も想起させる。

ウイグル人らはモンゴル族のナイマン (セギズ・オグズ) とエセン・タタルと世界的な貿易関係を保ち、そして時には彼らと戦った。モンゴルの諸種族と諸民族において、ウイグルの都市文化と定住文化の影響は極めて大きかった。9 世紀中葉から 10 世紀 20 年代までモンゴルを支配したキルギスは、中央アジアにいた文化的種族の 1 つである。もちろん、彼らは可汗の本営をオルホン川流域に移した。彼らがモンゴルで新たな城址を建設したかどうかは、明確に残っていない。

10 世紀 20 年代から 12 世紀前半までモンゴルの地を支配した契丹 (モンゴル起源の民族) の時期には、一連の城址が建設された。

契丹にとって城の建設は、その時にモンゴルにいた抵抗する種族鎮圧の方法の 1 つとして始まった (例えば阻卜^{そぼく}の蜂起)。

契丹城址の住民構成は、先行する時期の都市のものと全く別のものであった。前時代の都市の住民の大多数は、支配されていた在地種族で構成されていた。契丹の城址 - 要塞の住民はというと、守備部隊、在地種族出身の反乱者、軍事力で鎮圧された中国人、渤海人、蠕蠕流刑者であった。¹³

10 『蒙古遊牧記』(ポボヴァ P. S. [訳]), 340 頁。

11 Рамstedт Г. И., *Уйгур улсын хураангуй туух*. [ラムステッド G. J. 「ウイグル国略史」] (手稿: モンゴル人民共和国科学委員会の歴史室アルヒーフ保存)

12 「セレンゲの石」と呼ばれている石の上にはウイグル可汗モユン・チョル⁷⁾のことが書かれている。石はモゴイン・シネ・オス (Могойн шине ус) (ボルガン^{アイマク} 県^{ソム} サイハン郡) にある。

13 『蒙古遊牧記』(ポボヴァ P. S. [訳]), 339-340 頁。そのことはまた、『遼史』第 1 冊、22 頁 (中国語)。『モンゴル諸県の土地管理政策 (Олон Монгол аймгийн газрын ойллого)』(満州語からの翻訳)、(写本はモン

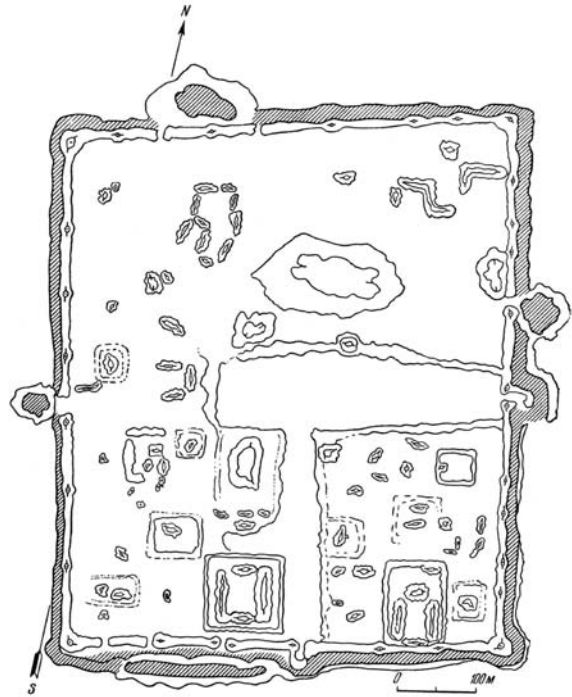


図 5 11 ~ 12 世紀のズーン・ヘレム城址のプラン (ヘルレン川河谷)

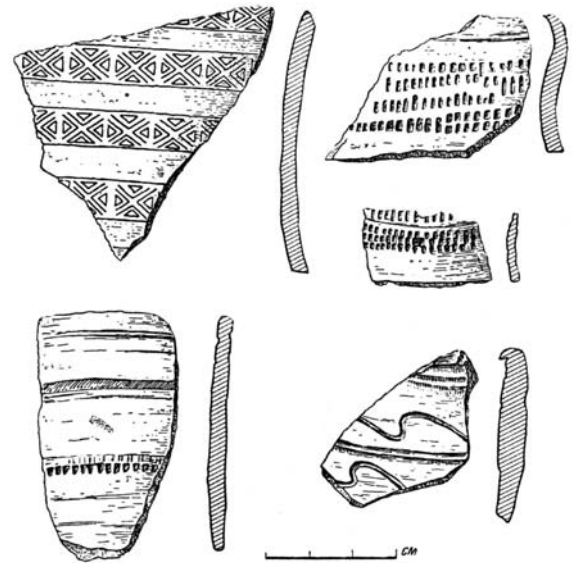


図 6 ズーン・ヘレム出土土器片

契丹の城址 - 要塞には職人 (陶工と鍛冶職人) もまた住んでいた。城址近郊の播種に適した土地は耕されていた。このような作付けは、大多数においては「軍圃」と呼ばれていた。この時代の特徴については D. A. クレメンツと S. V. キセリョフによるウランバートルーホブド国道上のハダサン駅 (ст. Хадасан)

ゴル人民共和国国立図書館アジア部所蔵)。『大遼国の研究』(満州語)、巻 5、北京、1633 年、36 ~ 37 頁。『大遼国の王室年代記』(*Дайляо улсын эх адгийн хэргийг тэмдэглэсэн шастир*)、第 1 冊、北京、1913 年、69 頁 (中国語からの翻訳)。

付近にあるハルホリン・バルガスとチン・トルゴイの著作に書かれており¹⁴、また著者らによるヘルレン川にあるズーン・ヘレムとバルス・ホト I の論文でも考察されている(図 5~8)。

契丹の城址内そしてその近くで手工業と農業が展開されていたとはいえ、不明なのは、どのような影響を当時のモンゴル民族に与えたのかということである。それゆえに契丹時代の研究、特に城址研究では、当時のモンゴルを見出すには考古学者のより深い研究が必要である。その影響は、モンゴル人民共和国域内のモンゴル民族の封建体制発達を説明する出発点である余剰財産として作用した。

文献史料に基づいて判断すると、モンゴルにおいて 7 世紀と 8 世紀の境目にはいくつかの城址があった。

1949 年にモンゴル人民共和国科学委員会とソ連科学アカデミーの学術調査隊が実施した考古学研究は、カラコルム遺跡の南において土塁で取り囲まれた破壊された石製亀趺を発見した(現在のエルデネ・ゾーの南の石製亀趺)。その発掘で、9 世紀のウイグル城址ハル・バルガスで発見されるものと同時代の遺物群が得られた。

おそらく、このあまり大きくない城址はカラコルムより早い時期であり、いくつかの資料に基づく 12 世紀末にオン・カン(ワン・ハーン)が住んだものであろう。これに関して満州語で書かれた出典による資料もまた存在しており、オン・カンは生涯の終わりにツェツェイ山(Цэцэй)に近い隠遁所で城址を建設し、それはチンギス・ハーンに破壊された。¹⁵ ツェツェイ山より北の考古踏査に伴って、実際

14 Клеменц Д. А., 1895, *Археологический дневник поездки в Среднюю Монголию в 1891 году, Сборник трудов Орхонской экспедиции, вып.2*, СПб: 27-46. [クレメンツ D. A. 『1891 年北モンゴル旅行の考古日誌』(オルホン学術調査報告集, 2 巻)]

Радлов, В. В., 1895, *Атлас древностей Монголии*, Типография Императорской академии наук: табл. LXIII-LXVI. [ラドロフ V. V. 『古代モンゴル地図集』帝国科学アカデミー印刷所、図 LXIII-LXVI]

キセリョフ S. V. 「古代のモンゴル」『ソビエト科学アカデミー報』歴史・哲学 IV -4: 370-371.

キセリョフ S. V. 「モンゴルの古代都市」『ソビエト考古学』1957-2: 95-97.

15 『モンゴル諸県の土地管理政策』[(*Олон Монгол*

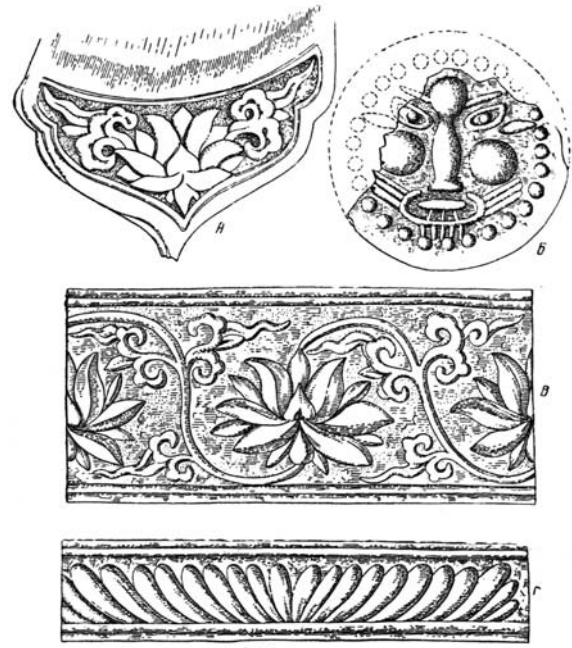


図 7 バルス・ホト I 城址の遺物
A, B: 瓦当 B, Г: 外装磚の様様

に 2 つの居住址廃墟が発見された。それは、ヘーリーン・ボルギーン・トーリ(Хээрийн булгийн туль)とドグシヒン・バルガス(Дугшихын балгас)である。その他に、タミル川付近には、同時期の廃城址がある。¹⁶

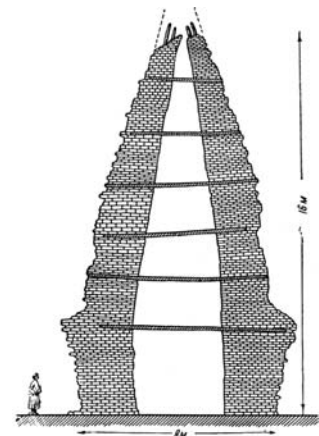


図 8 11~12 世紀のバルス・ホト I 城址にある 7 層仏塔の断面とプラン

モンゴルの 13 世紀初めの古代城址と居住址はほぼ研究されていない。上述資料に基づく検証と考古発掘の実施が必要である。

東西の旅行家(プラノ・カルピニ、ウィリアム・ルブルック、マルコ・ポーロ、長春真人(邱処機)、張德輝⁸⁾)は、最も多くチンギス・ハーン的首都カラコルム(ハルホリン)について書いている。我々

аймгийн газрын ойллого)

16 Клеменц Д. А., *Дневник, рукопись*. [クレメンツ D. A., 日誌. 手稿。](モンゴル人民共和国科学委員会歴史部アルヒーフ保管)



図9 モンケ・ハーンの長寿に関する碑文のある
コソゴル県のザグズー谷の城址の近くに立っていた
石碑

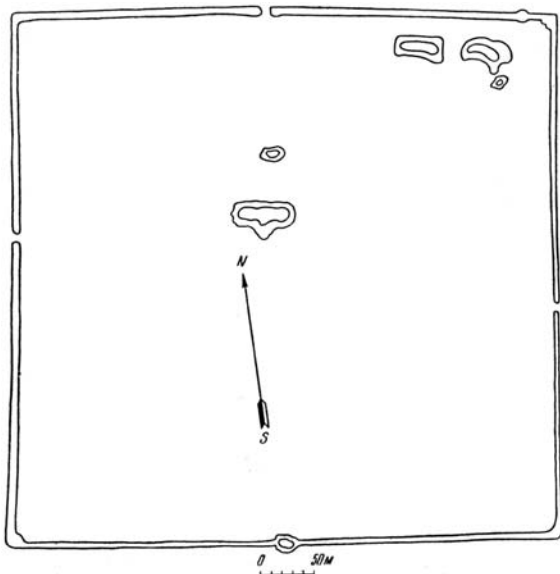


図10 トゴン・テムルによって建てられた
バルス・ホトⅢのプラン

は今日まで、モンゴルにおいて13世紀末から14世紀初めにカラコルムのような大きな城址を知らない。ところが17世紀のモンゴル人の歴史家サガン・セチェンは、フビライの時(13世紀60～80年代)にモンゴルには大都(現在の北京)に比肩する2つ

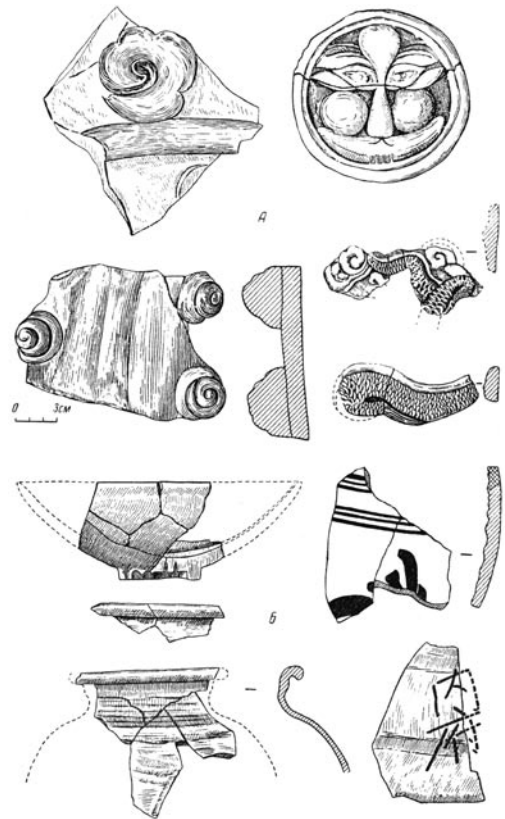


図11 バルス・ホトⅢ調査に伴って出土した遺物
A: 南門から出土した様々な色の釉薬をかけて装飾された破片と瓦 B: 土器、磁州タイプの灰色陶器、漢字銘文のあるもの

の大きな都市、エルチュ・ギーン・ツアガン・バルガス(Эрчу-Гийн цагаан балгас)とアルリン・ツアガン・バルガス(Арлын цагаан балгас)があったと記している¹⁷。

1953年にモンゴル人民共和国科学委員会考古調査隊は、エルチミン山脈(Эрчийн нуруу)の北のデルゲル川(Дэлгэр мурун)河谷盆地に位置するザグズー谷(Загзуу)で壊れた大規模な城址を発見した(コソゴル県^{アイマク}⁹⁾)。注目すべきことに、デルゲル・ムルン河岸のこの廃墟の北に、漢文とモンゴル文が書かれた碑が立っており、さらに何らかの居住址遺跡がある¹⁸。石碑には、モンケ・ハーンの長寿を願う祈願文が書かれている(図9)¹⁰⁾。ホクシン・

17 サガン・セチェン『蒙古源流』(写本:モンゴル人民共和国科学委員会歴史部保管)

18 Намнандорж, Отчет о работе второй музейной экспедиции 1953 г.: 606-64. [ナムナンドルジ「1953年に実施した第2回博物館学術調査の報告」](モンゴル語手稿。モンゴル人民共和国学術委員会歴史部保管。)

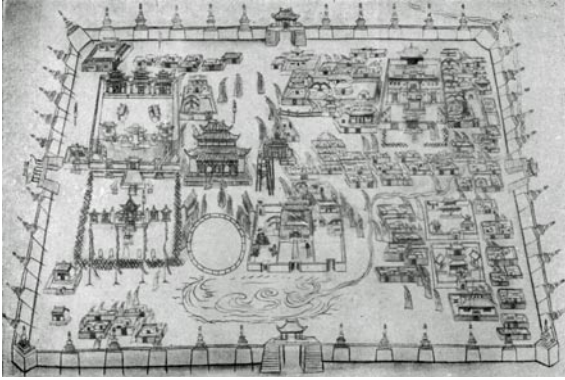


図 12 1586年に建造された最初の定住寺院
エルデネ・ゾーの図(19世紀)



図 13 テス川沿いの17世紀の石築城塞址¹³⁾



図 14 エルデネ・ゾーを造営した
アブタイ・ハーン(1587年没)

テール山(Хөгшин тээл)(ウブスハンガイ県)の近くで、フビライとアリクブケの大ハーンをめぐる抗争(1260年)に関連する要塞が発見された¹⁹⁾。要塞付近の漢字銘文では、その城は「陛下の城」と呼ばれている¹¹⁾。ヘルレン・バルス(Хэрлэн барс)¹²⁾の東15kmのところ、14世紀70年代にトゴン・テムルによって建てられた八兒思の町の遺跡(Барс)がある²⁰⁾(図10, 11)。

中国の旅行者の長春真人と張徳輝は、13世紀初めにヘルレン川とオルホン川河岸に手工業と農業の居住址があったと記載している。現在考古学調査で

確かめられたところによると、モンゴル人民共和国南部には軍事・手工業居住址が存在していた。

古代モンゴル期になると、城址は少なくなり、牧畜業が農業よりも住民の経済において重要な意味を持つようになった。

B. Ya. ヴラディミルツォフのこれに対する見解によると、14世紀末からモンゴルでは封建的零細化が強まり、城址と居住址の立地は悪くなり、15世紀初めになるとそれらは荒廃したことが最新の考古学データから確認が得られた。

15世紀から17世紀にかけて、モンゴルにおいて封建的零細化は頂点に達した。この時期になると、新たな城址の出現がないだけでなく、多くの旧来の居住址が廃棄されたらしい。ダヤン・ハーンのバト・モンケ(バト・ムフ)が自身の首都としてカラコルムを築いたことが知られている。

アブタイ・ハーン(1586年)のカラコルム遺址には宮殿があったという記録がある(図14)。しかしこれはもちろん、アブタイ・ハーンが新たな町を築いたことを意味するのではない。周知のように、彼は残っていたカラコルム旧址からその建築細部を利用して最初の定住寺院——名高いエルデネ・ゾーを建設した(図12)。エルデネ・ゾーはチンギンド

19 Козлов П. К., 1928, *Краткий отчет о Монголо-Тибетской экспедиции Государственного русского географического общества 1923-1926 гг.*, (Северная Монголия, вып.3), Л: 43 табл.VIII рис.15. [コズロフ P. K. 『1923～1926年のロシア地理学協会モンゴル・チベット調査団に関する簡報』(北モンゴル3巻), レニングラード, 43頁, 図版VIII, 図15]。コズロフは、これら遺跡の近くに城址が1275年にフビライ・ハーンの軍によって建設されたことを証明する漢字碑文があると指摘する。

20 Перлээ Х., *Хэрлэн-барс-хот*. [ペルレー Kh.「ヘルレン・バル・ホト」](手稿:モンゴル人民共和国科学委員会歴史部保管。68-84頁。)

期 (Chingishid) から保たれてきた碑銘が保管されてもいる。

17世紀初めから、何人かのモンゴルの領主らが新たに城を建設した。このことは B. Ya. ヴラディミルツォフが指摘している。もちろんこの時代には、ツォグト・タイジが領主の館を築いた。この時代の城は、角に櫓 (角墩) のある四角形の城で、そのことはロシアの旅行家であるイワン・ペトリン (Иван Петлин) が 1620 年に記している。この時代から石築の城、防備施設のある僧院と寺院が築かれ始めた。例えば、現在まで保存されてきたハルボフ川の遺跡¹⁴⁾、ホグノ - タルナ山の遺跡¹⁵⁾、サリダク山の遺跡¹⁶⁾ 等々がこれを立証する。この時代の城と寺院は、基本的に領主の館であった (図 13)。この時代、また前代においても、城は個々ばらばらで、おそらく互いに関連する力がなかった。しかしこの時期の城の十分な考古学調査は行われておらず、その社会的・政治的意味を明確に究明することはできない。またこのような城の発展は、外モンゴルと内モンゴルの文化面での活況に関連していることが認められ、それはモンゴル統一の思想が表現された 1640 年のオイラト・モンゴル法典が定められた時期であり、内モンゴルと外モンゴルの多くの学者らが著作を記した。

18世紀初めになると、満州人の侵略者が外モンゴルを完全に支配した。この時期の西モンゴルでは、ハルハ・モンゴルとオイラト・モンゴルの侵略者に対する闘争の旗が再三あがった。これら蜂起を平定する戦いで、満州人の侵略者は外モンゴルに「軍事城塞」を築き始めた。これらの城の最初は、おそらく 1720 年に築かれたオリヤスタイ (Улястай) であろう。この時期から 18 世紀末まで満州人はモンゴルで一連の「軍事城塞」を建設し、軍を留めると共にその軍を養うための農業居住址を築いた。1756 年から 58 年には、西モンゴルと東モンゴルで突如燃え上がった牧民蜂起の過酷な鎮圧があった。この時期から満州駐留軍の数は減少し、また満州皇帝の勅令に沿って多くの「軍事城塞」が破壊され、備蓄食料が焼かれた。18 世紀末からのモンゴルにおける独特の立地の要塞の後に、満州人の侵略者は、例えばオリヤスタイやホブドといった若干の城でのみ軍を保持した。後の時代には、イフ・フレー (オルゴ) がトーラ川河谷盆地に移転され、満州人らは

そこに 3 基の軍事要塞を築いた。その遺址は現在までウランバートルの近くにある。その他に、外モンゴルの完全な服属の目的で、満州の侵略者はオリヤスタイ、ホブド、イフ・フレーといった町に専任の地方長官、彼らの代理人、そして裁判官を置いた。この時からこれらの町は軍事の城としてだけでなく、行政の中心になった。これと同時に、中心地から中国貿易の町、すなわち買売城^{ばいばいじょう}と呼ばれるものが発生しはじめた。それら買売城は、19 世紀モンゴルのオルゴ、オリヤスタイ、ホブドとその他の町の新たな独特な部分である²¹⁾。

21 Греков Б.Д.[ерөнхийн редакци], 1955, *Бүгд Найрамдах Монгол ард улсын түүх*, Улаанбаатар: 212, 215. [グレコフ B. D. 編『モンゴル人民共和国の歴史』ウランバートル]

原載：

Пэрлээ Х., 1957, К истории древних городов и поселений в Монголии, *Совесткая археология 1957-3: 43-53*. [ペルレー Kh. 1957 「モンゴルの古城址と居住址について」『ソビエト考古学』1957-3: 43-53.]

訳註：

訳 1) トウシュート・ハン^{アイマク}県は 1691 ~ 1911 年に存在した県。現在のセレンゲ、トゥブ、ドルノゴビ、オムノゴビ^{アイマク}県に相当する。

訳 2) トウシュート・ハン県の現在の県との対応は上記訳 1 のとおりであるが (アルハンガイ県は入らない)、原文のとおり訳出した。

訳 3) 著者名は原文にないが付け加えた。張穆 (1805~1849 年) は清代の人。

訳 4) 「歴史記録」と訳出した部分の原文は「« Исторические записки»」となっており、これは一般的に『史記』である。しかし『史記』に後代の突厥のことが記載されているはずはない。出典として註 6、7 を引いているものの確認できないので、「歴史記録」と訳出した。

訳 5) バルス・ホト II はバローン・ドローギーン・ヘルムとも呼ばれる。一帯に所在する城址に I ~ III の番号を付けた名で呼ばれる場合と遺跡名で呼ばれる場合との二通りの名称がある (末尾参考図参照)。

訳 6) 原文は巻号が誤りであり訂正した (VI → XV)。

訳 7) ウイグル可汗国の第 2 代可汗^{かつろくかがん}の葛勒可汗。名は

モコン・チヨル
磨延嘷。

訳 8) 張徳輝 (1195~1274 年) は『塞北紀行』の著者として知られる。『元史』列伝に伝がある。

訳 9) コソゴル県は現在のフブスグル県。

訳 10) 以上の遺跡と石碑は、アルタンガダス遺跡 (釈迦院遺跡) と釈迦院碑として知られている。遺跡概要と碑文釈文については下記を参照されたい：松田孝一・オチル 2013 『モンゴル国現存モンゴル帝国・元朝碑文の研究』 (ビジュアル・プロジェクト成果報告書) 大阪国際大学

訳 11) 以上の遺跡と石碑は宣威軍城址とホクシン・テール碑として知られている。遺跡概要と碑文釈文については上記の松田・オチル [2013] を参照されたい。

訳 12) ここで言うヘルレン・バルスとはバルス・ホト I、バルスの町とはバルス・ホト III を指している。

訳 13) 遺跡はスミーン・トルゴイン・バルガス (Сүмийн толгойн балгас)。

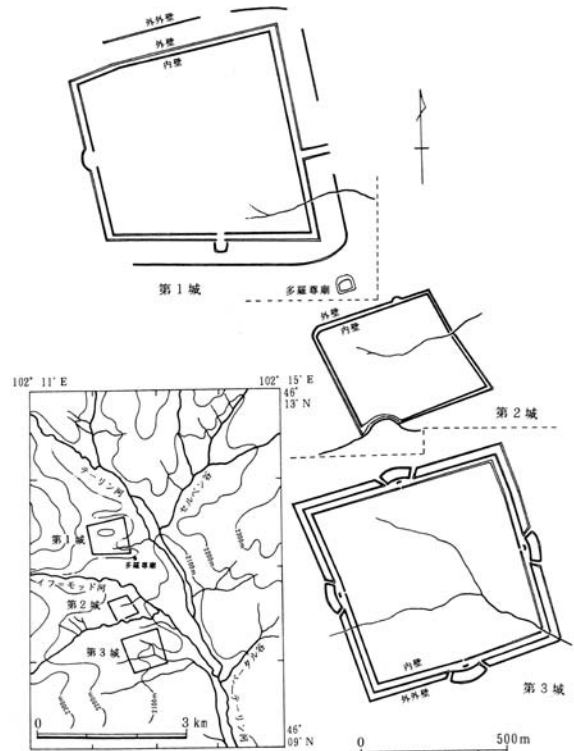
訳 14) ハル・ボフ城址 (Хар бухын балгас)。

訳 15) ホグノ・タルニン・ヒード (Хөгнө тарнын хийд)。

訳 16) サリダギーン・ヒード (Сарьдагийн хийд)。

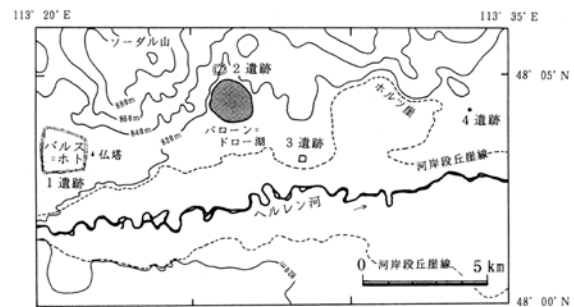
翻訳後記：

本訳稿は国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B)) 「東部モンゴル新発見の突厥・ウイグル期の定住遺跡に関する歴史・考古学的調査研究」, 代表者：大澤孝の研究成果として訳出した。また遺跡についてご教示いただいたきました白石典之先生に感謝いたします。



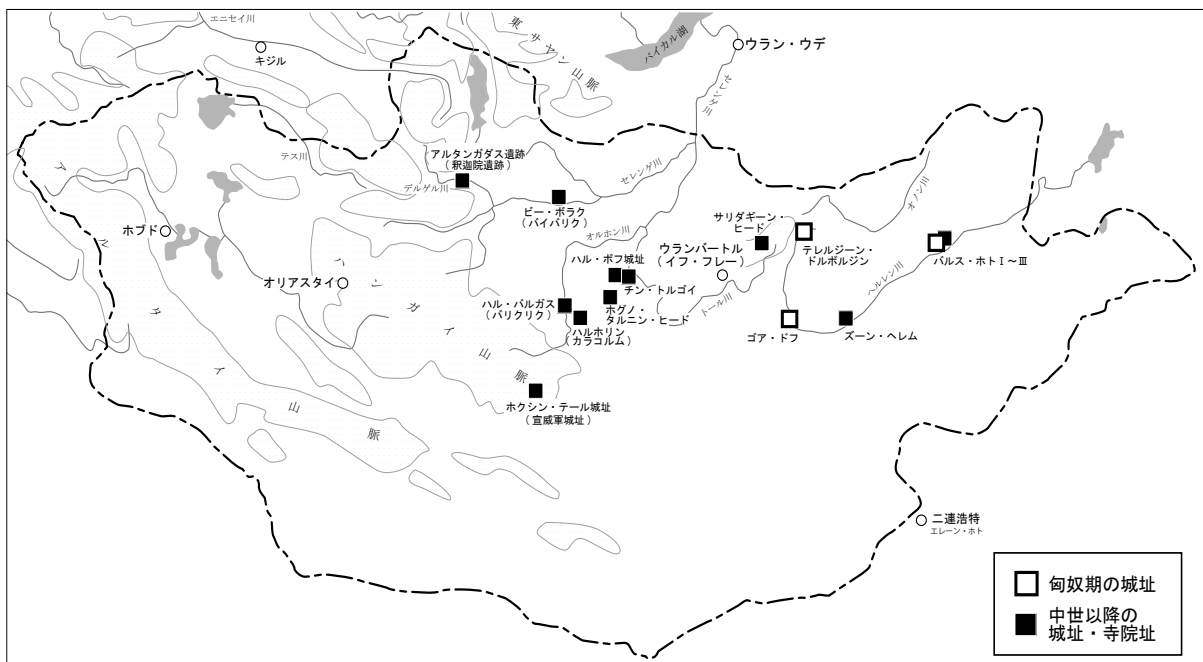
ホクシン・テール城址

(白石典之 2002 『モンゴル帝国史の考古学的研究』 269 頁, 図 3-58)



バルス・ホト I ~ III

(白石典之 2002 『モンゴル帝国史の考古学的研究』 288 頁, 図 3-68)



参考図 1 本稿中で登場する遺跡と地名